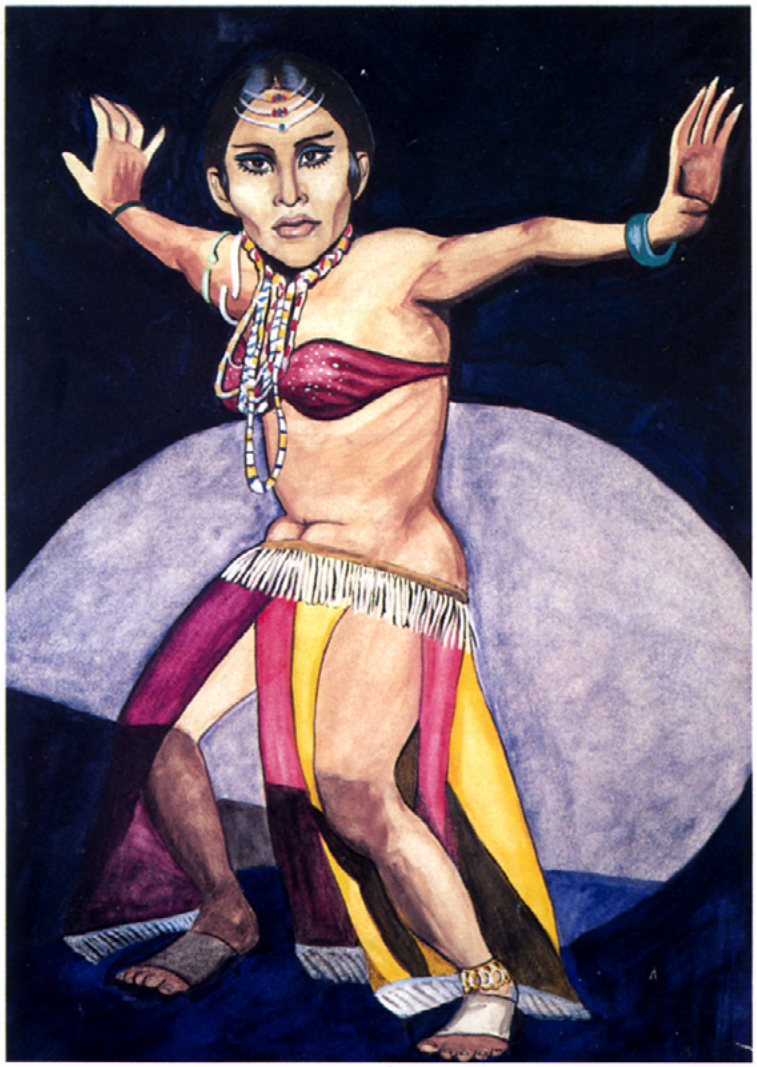
「新宿に生きる女」◉誌上展

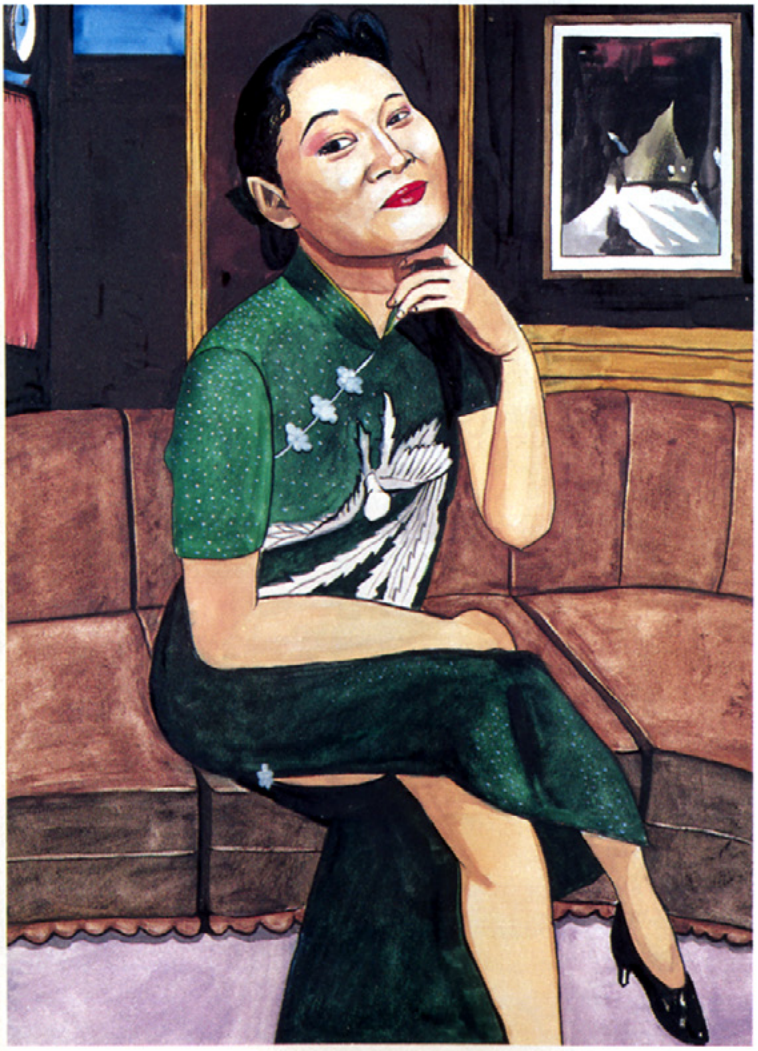
したたかにたくましく

●絵と文――藤森玲子

イラストレーター藤森玲子が、雑多な繁華街・新宿に生きる女たちを描いた。SMの女王、風俗の店で働く女、市場で店を開くおばさん、ニューハーフ……。藤森が描く一人一人の表情から、素顔と生きざまが、ひしひしと伝わってくる。（編集部）



フリー・ダンサーの陽気なカメさん



クラブの人気者で歌が上手なイェンちゃん

スナックのヒョーキン・サニー

キャバレー・ダンサーで、従業員のリーダー的存在のマユミさん

SM喫茶で働く男まさりのマリさん

[新宿に生きる女]

この道30年、スナック経営のヒロママ

キャバレー専属歌手のムード派・リナちゃん

クラブで働くニューハーフはひょうきんが〝売り〟のヒデロー

会ったのは、風俗情報紙の主催する船上パーティーだった。長身で、黒のボディコンスーツ姿は、たくさんの人の中でも一際目立っていた。彼女と話をすると、新宿でSMクラブをやっているという。リーさんの堂々たる風貌に魅力を感じ、「絵を描かせてくれる?」とお願いしたら、「いーよー」と、拍子抜けするほど気軽に承知してくれた。店は歌舞伎町にあるワンルームマンション。中には鞭だの手錠だの、SMに使う道具がいろいろとあり、絨氈には点々と血のたちそれぞれの血でとった「チン拓」が飾られている。彼らの一筆が添えられていて、「粗チンで恐縮ですが、このよーに拓本できたことを感謝しています」などと書かれている。籠の中には、直接ローをたらした後、冷やして型どった男性自身も陳列してある。ナチスの旗の前でポーズをとりながら、リーさんは、

「レーちゃんが絵の個展をやるなら、私もこのコレクションで展覧会やってみよーカナ」

なんて、マジな顔で言う。

不明になった。私の所へリーさんから電話があり、

「マミちゃんが、店に連絡もなしにずっと休んでいるの。電話も電報も打っているんだけれど……。とても心配で」

と話す。その時、私は人を傷めるSMの女王ではあるけれど優しい人なんだナと、彼女の素顔を見たような気がした。

× ×

昭和三十三年から占いを始め、ずっと新宿に店を構えている栗原さんでも、デパートの前で立っているだけだけど。それでも彼女に占ってもらいたいと、長い行列ができる。彼女が占いを始めたのは、赤線廃止後、職を失った女性達の相談を受けたのがきっかけだった。自分の「失恋」も一つの要因だった。ヤクザに嚇されたり、同業者からいやがらせをされたり。でも栗原さんは、ひるむ事なく堂々と続けている。彼女の〝弱い者の味方〟という信念が、そういった人達を蹴散らすのだ。店が休みのある日、彼女の持ち場に占い師がいた。占い師が彼女を呼び止め、手相をみながら占いを始めた。どうも栗原さんを知らないらしい。そして、

「あなたは一週間後に死にます」

と、のたまう。彼女は冷静に最後まで聞いてみることにした。

「僕の師匠に立派な方がいますから、その人に相談しなさい。手数料は十万円です」

と、言われて初めて彼女は啖呵を切った。

「私を知らないの? ここで占いやっているのよ」

相手は、この人が噂に聞いていた栗原さんだということに気がつき、しっぽをまいて帰った。彼女は、

「人の弱みにつけこんで、阿漕な商売をする人もいる」

と怒りを抑えながら話した。

大都会にいる彼女を求め、地方からたくさんの女性が来る。時代とともに相談の内容も変わってきている。少し前までは、不倫の恋で悩む女性が多かった。いまは、掛け持ちでつきあっていて、どの人にしようかと、ドライに相談してくる女性が多くなっているという。時代とともに女性の恋愛観や性意識も変わってきてい

タイから来た、恋をしているヌンちゃん

タイの踊りのポーズをとるヌンちゃん（左）を取材する藤森玲子

「新宿に生きる女」

クラブの従業員でニューハーフはしとやかなリサちゃん

ファッションヘルスで働く、お茶目なチカちゃん

魚屋の働き者の奥さん、セツコさん

るようだ。

× ×

私の家の近くに三光市場がある。昭和四十五年にでき、地上げにもあわず、ビルにはさまれ、そこだけ時間が止まっているかのような、昔のたたずまいを見せている。小さな市場に肉屋、魚屋、雑貨屋、乾物屋、八百屋、豆腐屋が入っている。魚屋の大矢さんは十九歳の時、親の後を継いで仕事を始めた。新宿には大手のデパートをはじめ、中小のデパート、スーパーがひしめいている。そんな中で商売をするのはたいへんだろうという疑問に彼女は、

「それが不思議なの。ここの近くにクィーンズシェフというデパートができる時は心配したけど、そこへ来るお客さん達がこっちへ流れてくるの。デパートが休みの時は、ウチも暇になる。結局、共栄共存ってわけね。いまはオフィスが周りに多くなって、住んでいる人も少ないから、他の土地から来ているお客さんも結構買いにくるのよね」

と話してくれた。

× ×

新宿は夜も昼もなく、一日中動いている街。私自身も新宿に住まいがあり、当分離れるつもりはない。新宿にこだわり続けるのは、新宿という街自身に大きなキャパがあるからだ。きどらず、すまさず、太っ腹に誰でも受け入れてしまう街なのだ。

住んでいるうちに、さまざまな職種の人と出会い、さまざまな友達ができた。中でも女性達は実に生き生きと仕事をしている。私はこんな人達に囲まれながら、新宿に住み続ける。

藤森玲子個展「新宿に生きる女」は、4月1日から14日まで、東京・自由ケ丘の「もみの木画廊」（世田谷区奥沢6―33―14、電話03―3705―6511）で開かれます。

AD

おとなしい豆腐屋の奥さん、フミコさん

パブのママ、笑い上戸のおネエ